二つの律法

２０２３年4月８日
西九州伝道所
佐々木正明

　使徒パウロが霊感を受けて書いた教えによると、神は人間に二つの種類の律法をお与えになりました。同じ神が与えてくださった律法ですから、本質的には同じ性質の律法ではありますが、その目的と機能においてはまったく異なったものです。その二つの律法とは、ユダヤ人に限って与えられた、つまりユダヤ人だけを対象にした、旧約聖書と言う律法と、ユダヤ人をも含めたすべての人類に与えられた、より基本的な律法で、パウロによればすべての人の心に記された律法、あるいは人間としての自覚を持つ者すべてに与えられた、自分自身という律法です。(ロマ書Ⅱ章 12 - 15 節)　この短いパウロの言及を、聖書的にまた神学的に発展させると、つまり、聖書全体を総合的に読み、パウロの言うことの背景を、統合的にまた理論的に考察すると、パウロの言っていることが、かなり理解できるようになります。

　パウロがいう、心に記された律法、人間自身がその人の律法となると言われた律法は、人間が神に似せて造られたという、聖書的事実に由来するものです。神に似せて造られた人間の本性、特性、あるいは本能と言われる特質が、おのずとして律法の役割を果たすということです。以下、この二つの律法を対比することによって、理解を進めたいと思います。

心に記された律法	文字で記された律法
Ｉ．すべての民族に普遍的に与えられた。	1．ユダヤ民族に限って与えられた。
2．人間が神に似せて造られたとき、神に似た人間の本性として、また人間の本源的欲求として与えられた。	2． ユダヤ民族が、神の救いの働きのために、選び出されたときに与えられた。
3. 人間が人間として生きるための道しるべとして、文字を通しての知的理解よりも、むしろ本能の発露として機能するように与えられた。理性的で冷静な知的行動を超えて、感情のほとばしりとしての、行動に現れることが多い。	3． ユダヤ民族が、民族として神が準備された救い主を迎え入れ、救い主を信じ、救い主の働きを理解し、救いの働きのために働くことができるように、知的にまた体験的に理解できるように、文字で書かれた教導書として与えられた。
4． 救いを与えるものではなく、かえって、ユダヤ人をも含むすべての民族を、裁くものとして与えられた。	4． 救いを与えるものではなく、かえって、ユダヤ人を裁くものとなる一方、ユダヤ人がキリストを信じるための導き、すなわち養育係としての役割を与えられた。

Ｉ． 律法が与えられた対象と目的

まず、明らかな対比となっているのは、二つの律法が異なった対象に向け、異なった目的を与えられて、異なった時期に与えられていることです。このことを明白に理解しなければなりません。この点が曖昧だったり、心に記された律法を軽視したり、無視したりするところが、今の欧米の神学の欠点です。そこから、彼らの宣教の方法に問題が出てくるのです。欧米の神学は、この心に記された律法に、ほとんど興味を示しません。興味がないのではなく、むしろその大切さに全然気づいていないのです。だから取り扱ってもいない。取り扱っていないのだからまったく分かってもいない。そしてもっぱら、文字で記された律法、すなわち旧約聖書にのみ、多大の興味を抱くのです。本当のところ筆者は、欧米神学で真剣に心の律法に触れたものに、出会ったことがありません。ただし、この 30 年間、欧米の神学書に触れたことがありませんので、最近になってこれを取り扱ったものが出されているのに、筆者が知らないだけかもしれません。その場合はお許しください。（チャット GPT に問い合わせたところ、キリスト教の歴史の中に、この点について論じた人、あるいは文献は皆無だということでした。）

すべての人間は罪人であり、生まれたときから罪の中にあり、神の厳しい裁きの対象であるというのは、それ自体正しい教えであり、パウロの神学の根幹をなすものです。しかしまた、人間と言う存在は、神の姿、すなわち神の性質に似せて造られていると言う、重大な記述を無視した教えでもあるのです。人

間は神の姿に似せて造られた、非常に尊い存在であり、神の愛の対象なのです。それは、人間が罪を犯して神のみ許から追放された後も、変わっていないのです。その点を無視したまま、やれ原罪だなんだと騒ぎ、聖書の明白な教えから離れて、人間の理屈を並べているのが西欧の神学であり、異邦人伝道に重大な欠陥をもたらしているのです。すべての人間が罪人であるというのは、正しい聖書的な教えであっても、その前に、人間は本質的に神に似せて造られていて、その本質は、罪を犯して神から追放された後も、完全に失われてはいないのです。まったく破壊され尽くしてはいないのです。少なくても、神を神と認めることが出来る本源的性質は、残されているのです。そうでなければ、ロマ書一章の偶像礼拝の議論はなりたちません。

西欧の神学は、旧約聖書、すなわち文字で書かれた律法に立っています。ユダヤ人に救いを語り、正しく導こうとした、パウロの論調に従っているためです。パウロは神学的に福音の普遍性を語り、異邦人への使徒と言う名誉ある名前を得ていますが、実際に異邦人伝道をしたことは、ほとんどありません。ですから、異邦人伝道によって認められた、異邦人への使徒ではないのです。異邦人伝道の苦しみ、悩みをあまり体験したことがなく、福音の異邦人への伝達という問題に行き詰まり、悩むこともありませんでした。彼は囚人としてローマに連れて行かれる途中、嵐に遭って難破し、マルタ島に流れ着いたことがありました。そこで一冬、約三カ月を過ごし、大きな奇跡を行い、大変な尊敬を勝ち取りました。しかし、そこでは 1 人の改宗者も出ていません。あまりにも小さな島で、ユダヤ人の会堂どころか、コミュニティもなかったようで、ようするに、完全な異邦人に囲まれて過ごしたのです。もちろんパウロは時間を無駄に費やすようなことはせず、熱心にそして大胆に、福音を語ったはずです。でも救われる人は、一人も出なかったようなのです。ですからもし、彼が 3 年あるいは 5 年と、マルタ島のような異邦人の環境で、宣教の働きに行き詰まりを感じながら過ごしたならば、異邦人伝道の神学も形成されたかもしれないのです。

いま私たちに必要なのは、この、パウロが書き記すことがなかった異邦人への伝道を取り扱う、パウロ視点に拠らない書物なのです。文字で書かれた律法は、あくまでもユダヤ人に対するもので、異邦人の為ではないからです。異邦人がそれによって裁かれてはならないのです。日本に住む日本人が、アメリカの法律で裁かれてはならないのと同じです。でも日本人は、長い間、ユダヤ人に与えられた律法で、一方的に裁かれ続けてきたのです。福音を聴いた日本人の多くが、良くは分からないままでありながら、人間はすべて、生まれながらに罪人だと説く教えに不満を募らせ、神の怒りと裁きの対象だと断言する語り口に、怒りを爆発させたとしても不思議ではありません。日本人は旧約聖書によってではなく、神に似せて造られた、人間の本性、人間としての本能、人間の特性によって、すなわち心に記された律法によって、裁かれなければならないのです。

とはいえ、文字で書かれた律法、すなわち旧約聖書は、キリストを信じる信仰への導き手、養育係としての機能をも持つものです。たとえ異邦人であっても、旧約聖書を正しく真剣に学び理解するならば、キリストを信じる信仰に至ることが可能なのです。また、旧約聖書が与えられる前の人間の姿と、その人間をお取り扱いになる神の姿も、読み取ることが出来ます。いま筆者が書こうとしていることの大部分は、

その律法を与えられる前のヘブル民族の姿、あるいは全人類の姿と、それらをお取り扱いになった神の姿を記録した、旧約聖書の一部、創世記の最初の数章から学ぶことが出来るものです。

創世記第 1 章 27 節前後の記録から、私たち人間は、神の姿に似せて造られたことが分かります。つまり人間は、神に似た存在だということです。ただし神と同じ存在ではありません。神はすべての面で無限ですが、人間はすべての面で有限なのです。ですから、有限の人間の知性で、神を理解することはできません。神と人間は決定的に異なった存在なのです。しかし良く似ているのです。人間はわざわざ、神に似たものとして造られたのです。これは地上の生き物の中では、人間だけに与えられた特徴であり、まさに人間が人間である証拠です。では神に似せて造られたとは、具体的にどういうことなのでしょう。

それはまず、人間が神の本質に似せて、霊的な存在として造られていることです。創造者である神は、本質的にご自分に似た存在を造り、ご自分とコミュニケーションを持つことが出来る、地上の動物をお造りになったのです。人間は神を感じ、神に想いを寄せ、神を敬い、神に感謝を捧げ、神を喜ぶことが出来る、特異な感覚的能力を賦与されているのです。神はその人間を愛し、人間との心の交流を楽しまれたのです。その一方で、人間は神との交流を欠いては、決して満足できない存在とされました。それは伝道者の書の著者が、自らを実験台として調べた結果、行き着いた結論でもあります。彼は世の中のあらゆる快楽を徹底的に追求し尽くしながら、ついに満足を得られず、結局、人間にできることは、造り主である神を恐れ、神の命令を守ること以外にはないと断言しているのです。人間にはあらゆることができる。しかしその心を満足で満たし尽くすのは、神との交わり以外にはないというのです。

あらゆる地上の創造物の中で、神との交流が出来るのは人間だけです。日本には、お寺の内に住むネズミが、お経を覚えてしまった話がありますが、人間以外の動物が神を感じることは、通常あり得ないのです。ロバが神の存在を感じ、人間の言葉を語ったという特異な出来事が、旧約聖書に記されていますが、それは神が必要に応じて、ロバに一時的な能力をお与えになっただけで、通常ではないのです。手のひらに載ってミャーミャーと鳴いていた捨て猫は、毎朝 5 時には家内のひざ元に鎮座して、長い祈りを聴いて育ち、まさにデブ猫にまで成長したのに、彼がお祈りする姿を見たことはありません。家内がお祈りする姿を見ると、近寄ってきて、あたかも自分も祈るかのように目を閉じるのですが、神様を感じているようには見えません。たとえオウムが祈りの言葉を覚えて繰り返したとしても、神を感じてそうしているのではありません。

肉体を与えられた動物ではありませんが、神に似ている存在として造られたものに、いわゆるみ使いとか天使と言われているものがあります。肉体が与えられていないだけ、ある意味で、人間より優れたより高い存在です。ところが面白いことに、この霊的存在が神に向かって罪を犯したとき、神は彼らを救おうとはなさいませんでした。人間が罪を犯したとき、神はご自分が痛みを負ってまで、人間を救おうとなさいましたが、み使いたちが罪を犯したときには、厳しい裁きだけが与えられているのです。これを見ると、神様は何となく差別扱いをしておられるように感じるのは、筆者だけでしょうか。それで筆者は、神にお仕えすることを主な役割として、非常に有能に造られたのがみ使いたちであり、神の寵愛を受けて喜び、神との交わりを楽しみとして生きるように、いわば、使役動物に対する愛玩動物のように造られたのが、人間であるかのように感じているわけです。人間は神の愛玩動物なのです。

また人間は、神を感じるだけではなく、たとえ朧気であったとしても異次元の霊的世界を感じ、他の霊的存在も感じ取ることが出来ます。だからこそ、幽霊の話が蔓延し、お化けの話もまことしやかに語られるのです。そして魑魅魍魎や神々の世界にも、興味を寄せるのです。ユダヤ人が、自分たちに与えられた律法を理解し、大切にし、そこで教えられたように神を礼拝しようとするのも、この人間性があったればこそなのです。この人間性がなかったならば、ユダヤ人も信仰を持つことはなかったのです。

さらに、人間が神に似せて造られたということは、神の美しい性質、聖い性質、正しい性質も、人間に賦与されたということです。ですからどんな人間にも、正しく生きようとする心があり、優しくしようという願いがあり、公平に取り扱おうという意識があるのです。たとえ罪の嵐が吹きすさぶ、悪魔の支配するこの世界にあっても、人間の本来の性質は存在し続けるのです。それは捻じ曲げられ、いびつにされ、本来の美しさと力を失っているかもしれませんが、確実に存在するのです。だからこそ人間は、宣べ伝えられる福音にも反応できるのです。

神に似せて造られた人間の本性は、宗教性に直接結ぶ着く霊性と、倫理性を通して宗教性にも結び付く善性にあると言えます。これらが、すべての民族に普遍的に、そして本源的に備わっている特質です。ところがパウロの記述を読むと、この人間性、心に記された律法に関係して、「良心」に対する言及があります。本当に僅かなのですが、間違いなく、人間の本性に関わりながら、本性とは少しばかり異なった存在として、単についでに触れた言葉としてではなく、本題に関わる大切なものとして、「良心」が記されているのです。しかしその良心とは何であるか、その機能と性質についての説明はありません。この辺りが、異邦人の伝道に本格的に関わることがないまま、天に召されてしまったパウロの記述の曖昧さ、弱さ、あるいは不完全さであると感じるのですが、あえて聖書の総合的教えに矛盾しないように、考察してみましょう。

人間の霊性、あるいは善性は、強弱の違いこそあれ、すべての人間に共通して存在するものです。しかし良心と言うものは、その人間が生まれ育った環境、後天的な教育などによって変化し、共通でも、普遍的でもなくなってしまった人間性です。それはちょうど植えられた種は同じであっても、土壌や気候、温度や水はけなどによって、随分と異なった生育をする植物と同じです。日本人の心にある人間の本性は、日本と言う特異な文化土壌によって、日本人らしい良心として芽生え、成長して行きます。同じように、灼熱の砂漠に生きてきた回教徒の間では、人間の本性という種は回教徒らしい芽生えをし、回教徒らしい良心として成長します。美しく優しい緑の野山に、定住性の強い民族として成長した日本人の良心と、灼熱の砂漠に生きる、定住性の低い回教徒の中で培われた、特異な回教徒の良心を単純に比較すると、まったく異なったものとなっていることでしょう。貸し借りの倫理、殺人や復讐の倫理、戦争の倫理、家庭の倫理、共同体の倫理、皆どこかに共通点を持ちながら、現れるところは非常に異なっています。同じ日本人の間でも、警察官の家庭に育った子供の良心は、本格的な詐欺師の家庭に育った子供の良心とは、異なったものになっていることでしょう。

ですから、人間が本質的な人間性を強く表に出して論じあうと、かなりの部分で合意し、同調できるの

です。ところがそれぞれの良心を基本にして論じると、ほとんど一致点が見いだせないままに終わってしまうのです。日本人も、砂漠の灼熱の中で育った回教徒も、人間としての愛とか優しさとか公平さとかを高く掲げて論じると、かなりの合意に到達し、ハグし合って終わることになれるのです。ところが、それぞれの良心に基盤を置いて話し合おうとすると、合意点を見出せず、ハグするのさえ非常に難しいことになってしまいます。機関銃を打ちまくって来たタリバンの兵士と、平和ボケした一般的日本人が、いのちの大切さについて話し合っても、なかなか一致点が見えてこないのも当然です。それでも、理不尽にも命を奪われた身内のために涙を流す姿に、共に涙を流せるのが人間なのです。

このような心に記された律法に対し、文字で記された旧約聖書と言う律法は、ユダヤ人だけに与えられたものです。それはユダヤ人が、すべての人類を救うために準備される、神の救いの計画の遂行に、効果的に用いられるように、用意を整えさせるために与えられたものだからです。旧約聖書は、神の救いの計画に選ばれたユダヤ人を教育し、訓練をほどこすためのものです。それは当然、ユダヤ人が選出されたときに、彼らに与えられたものであって、他の誰にも与えられたものではありません。それはユダヤ人が天地創造の神を知り、その神だけを礼拝するところから始まり、その神の力と栄光と人間に対する愛を体験し、罪の世界、悪魔の支配からの救いの計画を理解し、やがて送られてくる救い主について期待を高め、彼を迎え入れる準備を整えることが出来るためでした。そしてメシヤ、あるいはキリストと呼ばれる救い主の働きを知り、その働きをしっかりと受け止めて自ら救いを体験し、理解し、和解の福音と呼ばれるようになるその救いの教えを、全人類に伝える働きをするために、周到な準備をさせるためのものでした。そのために、その目的の遂行のために、いま旧約聖書を読む異邦人には関りのない、いわば無味乾燥に思えるような、イスラエルの歴史も長々と記されているのです。旧約聖書は、異邦人に与えられた書物ではありません。異邦人にも役に立つ、大切な書物ではありますが、異邦人に与えられたものではないのです。

その点新約聖書の、特に四福音書と使徒の働きが説く教えは、異邦人への神の語りかけとも聞こえるものです。特にキリストご自身の口から発せられたお言葉は、なにか、そのまま、日本人に向けて語られているのではないかと、思わせられるものです。キリストは神の姿を語るとき、しばしば人間を引き合いに出し、人間の姿から神の姿を理解するように勧められました。これは、人間が神の姿に似せて造られていることへの、裏返しの言及でもあるのです。しかもキリストは、必ずしも放蕩息子の父親のような、善良で情け深い人間ではなく、悪い人間の中にも見られる良い点に、目を向けさせているのです。悪い人間であっても、自分の子供には良いものを与えようとする父親。情けを持たない人間ではあるけれど、助けを求める女の声がうるさいから、早くきちっと裁判を終わらせようとする裁判官。そして、粗野で薄汚く、ならず者が多かった羊飼いの、失われた羊を一所懸命に探し求める姿から、神の姿を思い起こさせようとなさったのです。キリストは悪人の中にも美しい善性を見出し、異邦人たちの中にも、ユダヤ人に勝る清さをご覧になったのです。そしてキリストがお語りになった創造者は、小さな人間にも目を向け、愛おしく思ってくださる神なのです。種まくことも刈り入れをすることもない、空の鳥を養っていてくださる神。枯れ萎み、明日は火に投げ込まれる草花でさえも、美しく着飾らせ、死んで羽を剥きとられ、丸裸のまま藁で結ばれて束にされ、安値で市場に並べられている雀の一羽一羽にも、心を止めておられる神。

それが、キリストのお語りになった神なのです。犠牲よりも憐れみを好まれる神、すなわち旧約聖書の律法を厳しく守るよりも、すべての人の心に書き記されていながら、あたかも消え去ったかのように忘れられている、憐れみと言う本源的な人間の姿の方を大切にされる神なのです。

筆者などは、キリストは本当にユダヤ人だったのかと、ふと思ってしまうほどです。ユダヤ人はそれほど細やかに自然を観察し、それをいつくしむ繊細な心を持っていたのかと、信じられない思いなのです。ちなみに使徒ヨハネが、新天新地のエルサレムの美しさを描写したときの無機的な言葉と、キリストが語られた、草木や鶏が顔をのぞかせる言葉を比較してみると、あまりの違いに驚いてしまいます。キリストは、自然に親しみ、それを愛で、それを表現することが大好きな、日本人だったのではないかと思うほどです。だから筆者は、日本人の初心者に対して、キリストの十字架や贖いの話はしませんが、キリストがお教えになった教えについては、良くお話をします。

旧約聖書を読む数少ない日本人の多くが、そこに記されている神の厳しい姿に驚き、キリスト教の神は嫌いだと言ってしまいます。日本人が好むのは、厳格で激しく怒り、きつく罰する父なる神ではなく、どこまでも優しく温かく、すべての間違いも失敗も過ちも罪も赦して、抱きしめて共に泣いてくれる母なる神だと言い募るのです。知的理解力は抜群だと自認する、日本の知識層の人々の読解力の乏しさに涙が流れます。旧約聖書の神は「父なる神」としては描かれいません。父なる神とはもっぱらキリストの表現で、ともすれば厳しい神と受け取られがちな、旧約聖書に顕わされた神の、限りない優しさを表現した呼び方なのです。素直に旧約聖書を読むと分かるのですが、そこに描き出されている神は、単に厳しい怒りの神ではなく、頑なにねじ曲がった心で、反抗に犯行を重ねてはさらに堕落を続けていく、イスラエル民族を何とか立ち直させるために、涙ぐましい努力を重ねておられる神です。どんなに優しい母親でも、わがままを貫き、所かまわず大声で泣きわめく子に対して、いつまでもにこにこと笑顔で接し続けることはできません。時には鬼のような形相になることもあるし、厳しく罰する必要も出て来るでしょう。そんなときの母親を見て、あのお母さんはまるで鬼のようだというのは、正しくありません。旧約聖書に記されている神の姿の多くは、まさにそのようなときの母親に似ているのです。聖書をまじめにそして正し理解しようとする人は、旧約の神は怒りの神だとか、厳しすぎる神だなどとは言いません。しかしそれが、知識層と言われる人たちに影響された、一般的日本人の持っているイメージなのです。不従順を続ける頑固なイスラエル民族に対し、神は厳しくならざるをえなかったのです。旧約聖書は、反逆の民、不従順の民族、イスラエルに向けて書かれたものなのです。

キリストは、神に似せて造られた人間の、本質的姿に向き合ってお語りになるときには、非常に優しく、包容力と哀れみ、忍耐と寛容を尽くした態度を前面に出しておられました。ところが旧約聖書に馴染み、文字で書かれた律法に親しんでいた人々に対しては、とても厳しく挑発的な態度で、彼らの罪を指摘し、容赦なく裁きの言葉をお語りになっています。キリストのこのような態度は、ユダヤ人と異邦人と言う枠を超えたものです。キリストは確かに、民族としてのイスラエルの特権を認め、それを前提にお働きを進められましたが、一人一人の個人と接触なさった時には、人種によって大雑把に取り扱うのではなく、一人一人がどれだけ律法に馴染んでいたかを、基準として対応しておられます。だから同じユダヤ人

でも、律法に外れた生き方をしていた、売春婦や税金取りなどには、12 年間も長血を患って、キリストの憐れみを求めてやってきた、異邦人の女に対するのと同じように、人間性を律法とした対応をしておられるのです。

Ⅱ.　二つの律法が与えられた時と目的

二つの律法は、それぞれの目的に従って、別々の時に与えられました。第一に与えられたのは、人間が神に似せて造られた時です。神に似せて造られたという事実が、そのまま人間の本源的な性質となり、人間が人間として生きていくための、心に記された律法となったものです。つまり神に似た霊性と善性が、そのまま、心に刻み込まれ、律法の役割を果たすものとなったのであり、ことさら律法として、心に書かれたものではありません。むしろ知性によらず、理性にもよらず、非常に感覚的な、本能的な規範として与えられているのです。

人間が霊的感覚をもって、何か気高い存在を感じ、その存在を崇め、拝み、感謝を捧げるのも、知的な範疇によらず、理性の範囲を超えているものです。なぜなら、礼拝したいと望む対象が無限に気高いと感じるために、知性や理性を横に置いてしまうのです。これは特に日本の神道の、高尚な一面で大切にされていることです。ところが同じ神道的な感覚でも、低い世俗的な神道になると、八百万の神々や、魑魅魍魎の世界に堕落してしまうのです。しかし、高尚な神道精神の状態に留まり、少しだけの知性を用いるならば、偶像礼拝には至らなかったはずだというのが、聖霊の啓示と霊感を受けたパウロの理屈です。神道は最低限の知性を認めながら、知性の議論に陥らないように、高尚な霊的感覚に留まっているのです。だから神道には偶像がなく、神を理屈で説明しようとする神学もないのです。神に対する畏れも尊厳も無視して、ギリシヤ哲学の思考性をもって、むやみやたらに神を切り刻み、神とはああだこうだと言い募ったキリスト教神学に比べると、神道の「神学の無さ」が何と謙虚で美しいものかと感じるのです。でも神道を分かりにくくしているのは、一人の日本人の中に、そして同じ日本人たちの間に、高尚な神道の精神と低俗に堕落した神道感覚が同居してるのを、残念ながら、本人たちが気づいていないことです。

この普遍的な人間の本能的感覚から湧き出る、善性もまた理屈や理論では納得されないまま、心に記された律法として機能するのです。助けを必要としている者に対して、どうして緊急に助けに行くべきなのか、助けに行ったとしても、なぜその事実を言いふらしたり、自慢したりしないのかなどは、理性や知性によって説明される性質のことではなく、人間の善性に基づく本能的感覚として、そのように行うのです。何年か前のことですが、東京のどこかの駅で、線路に落ちてしまった日本人男性を救うために、線路に飛び降りて助けようとして自分の命を失ってしまった、韓国人青年の話が大きく報じられました。あるいは韓国人として、日本人に対する屈折した思いもあったかもしれません。あるいは日本人に対する尊敬の念もあったかもしれません。ただ言えることは、この韓国人青年は、人間として人間らしい行動をしたということです。神に似せて造られた、本来の人間の本能的善性を、咄嗟に顕わしたということです。

偶像礼拝に陥って、自分に与えられている善性を著しく傷つけてしまった人間は、素直に善を行うことが出来ず、あれやこれやと理屈をつけます。また理屈をつけなければ、他者の素直な善行を認めることが出来ません。ところがある人たちの間には、このような本能的感覚が色濃く残っているのです。

例えば、日本と言う国家は、お隣の韓国に乞われる形で併合をしました。韓国を日本の一部として吸収合併をしたのです。そうしなければ、韓国はロシアの植民地とされてしまうか、清国に吸収されて独立国となる機会を失ってしまうかの、瀬戸際だったのです。それはまた、日本がロシアからの侵略を防ぎ、独立国として存在し続けるためには、重要な課題だったのです。実際のところ、いろいろな交渉が行われ、様々な展開もありましたが、日本は韓国側の要請もあって、韓国を自分たちの国の一部として、他国からの侵入と亡国の危機を乗り越えさせました。この韓国の併合は、国際社会でも認められたのです。ただし、日本の多くの政治家や実業家たちは、韓国があまりにも貧しく、知的にも倫理的にも国家全体の発達が遅れていたために、併合してしまうと大変な経済的負担と社会的重荷になると、大いに反対をしていました。後に総監として、韓国を治める役割を担うことになった伊藤博文も、韓国併合には大反対をした一人ですが、安重根によって暗殺されてしまったのは、歴史の皮肉と言うものでしょうか。

しばしば歴史家も政治家も間違っているのですが、日本は韓国を植民地としたことはありません。言葉の意味を変えて、植民化は併合を含むというようなことを言って、日本が韓国を植民地化したと言い張る人たちもいますが、植民地化と併合はまったく異なるものです。植民地化とは、相手国や部族の意向とは関係なく、武力をもって相手国を自分たちの支配の下に置き、その国の富を搾取し、多くの場合、その国の発展とかその国人々の生活環境の改善などには無関心のまま、奴隷のように扱っただけでなく、植民地政策をやめ植民地を解放したときには、大概、極貧のまま放りだしたのです。それだけではなく、宗主国が植民地のインフラ整備などに注いだ金銭、たとえば、道路、橋、鉄道、ダム、電気などに用いた金銭は、独立のおりに宗主国への借金として、返済を要求されるのが普通でした。宗主国は植民地を略奪搾取するのを目的にしたのです。

ところが韓国の場合は、韓国住民を同等の日本国民として認め、ほとんどの分野で日本国民としての権利を認めています。日本は韓国のあらゆる改善に力を注ぎ、韓国人が日本人と平等の生活が出来るように心掛けたのです。日本が韓国を併合したときには、あまりにも貧しい韓国のために、当時の韓国の国家予算の何倍もの金を費やして、あらゆるインフラの整備に用い、さらには韓国の身分制度の改革、（韓国の両班から白丁に至る身分制度は、世界でも類を見ないほど酷いものでした。）学校の設立と教育の改善などに努めました。特に奴隷の身分で、教育から見捨てられていた多くの人たちが、学校教育を受けることができるようになり、社会の発展に大きく役立つことになりました。今は普通に使われているいわゆるハングル文字も、もとはと言えば韓国人の発明によるものですが、上級身分の者たちから卑しめられ、まったく普及していなかったものです。しかし日本政府はハングルの優れているところを見、これを積極的に用いるように整え、すべての韓国人がみな、読み書きができるようにしたのです。また、韓国の人たちは、昔からの韓国名を使うか日本名にするか、選択の自由を与えられ、多くが日本名を選びました。ここに、韓国人たちの間で言われているような、日本政府からの強要は一切ありませんでした。韓国人は

能力さえあれば、日本の有名大学にも、差別なく入ることが出来ましたし、朴大統領のように軍人になって出世することもできました。とにかく、日本の一部にされた後の韓国の、人口増加一つだけを取りあげても、大変な勢いでした。日本人としての暮らしが、いかに良かったかを示しています。もちろん、個人レベルでの差別はたくさんあったことでしょう。日本人同士の中でも、いろいろな差別が沢山残っていた時代のことです。しかし、法律としての韓国人差別は、ほとんどなかったということです。

日本の敗戦で、韓国の併合が終わりを迎えたときも、日本は韓国の改善のために費やした莫大な費用の賠償は、国家のものも民間のものを含めて、一切求めていません。すべてのインフラはそのまま残され、韓国のものとなり、多くは今に至るまで長く用いられています。朝鮮戦争後のハンナムの奇跡と言われる韓国自慢の発展も、日本が韓国に償いとして出した金を用いてできた発展であって、韓国の手柄ではありません。その金は、本来、日本から被害を受けたと主張する、個人に向けて出されるものでしたが、当時の韓国大統領の朴氏が、まず国家全体のために用い、国家が豊かになった暁には国家が個人に賠償すると言って、国家の発展のために用いたのです。今、韓国の個々人に賠償しなければならないのは、豊かになった韓国政府であって、再び日本に賠償を求める最高裁の判決は、お門違いであり国際法を無視したものなのです。国際的な慣行に従えば、むしろ韓国の方が、インフラ整備などに費やした莫大な日本の金を、賠償すべきだったのですが、日本はそれについてまったく何も言っていません。

また、韓国は日本による併合によって、平和と発展と安定を楽しんだのであって、韓国に対する償いの金と言うもの自体が、事実に反した意味のないものでした。韓国はその後もあれこれと、理不尽な要求、歴史的事実に反した要求を出し、日本から金銭を搾り取ろうとしていますが、全体的に、弱い者貧しい者に対する同情心に溢れている日本人は、国家として、このような無理難題の要求に応えてさえ来たものです。前大統領の文氏の時代の、いささか度を越えた反日に嫌気をさした日本が、最近は韓国の言いなりにはならなくなったようですが、日本人の同情する性格、あるいは簡単に進んで騙され、泣く子と地頭には勝てないと、あきらめてしまう「善良」な性格は変わらないようです。

韓国と日本の歴史的つながりを見ると、すでに記したように、日本が韓国に償いをしなければならない理由は、一切ありません。韓国人の日本に対する主張は、慰安婦問題にせよ徴用工問題にせよ、韓国人独自の歴史というか、彼らが捏造して学校教育にも用いている、事実に反した歴史に立っているだけです。ところが泣きわめく子を見ると、理由は問わず、つい可哀そうに思って手助けをしてしまう、お人よしが日本国民なのです。この性格は、わがままなイスラエル人を、最後までお見捨てにならない、天地創造の神を思い起こさせます。日本人の人間性は、神に似せて造られた事実を現しています。それが、哀れみの心なのです。それは理屈を超えた強い感情です。

文政権下で反日を叫び、日本製品不買運動を続ける韓国人に嫌気が差して、腹立たしく思った日本人も多いことでしょう。でも、長いこと中国の顔色をうかがいながら、なんとか生きてのびて来た韓国人の屈折した心に、痛みを感じている日本人もたくさんいるのです。自国のまつり事を放り出して享楽に明け暮れていた、李一族や、両班と呼ばれる少数の貴族たちの贅沢三昧な暮らしも知っていました。でも彼ら

にまったくの非民として扱われ、奴隷以下の生活を強いられていた、圧倒的多数の白丁たちのことも知っていました。併合以前の李朝の韓国について見聞きして、学んだことがある日本人の多くは、韓国という国のあまりの惨めさと倫理観の不足に、そっと悲しみ、同情をしていたのです。第二次世界大戦で、敗戦の苦しみを舐めた自分たちのことを思い出し、そこから這い上がるきっかけになった朝鮮戦争に、後ろめたい気持ちを隠し持つ日本人も多かったのです。その朝鮮戦争で国家二分の悲しみ、日本以上の苦しみを経験した、朝鮮民族に心を痛め、かつて日本人とされていた彼らの、国家二分の苦しみが、自分たちを戦後の貧しさから立ち直らせる、きっかけとなったを知っている日本人の中には、彼らを何とかしてあげなければと思い続けていた人も、少なくなかったのです。日本人の多くは、黙していますが、韓国人を身近に感じ、彼らが自分たちと同じように、平和で豊かな国を造り、高度な倫理観を持つ国民になってほしいと、心から願っているのです。これが理論や理性を超えた多くの日本人の態度です。ただ今は、泣き叫ぶ駄々子のような韓国に、手を焼いているというのが本音でしょうか。

一方、旧約聖書と呼ばれる律法は、イスラエル人に限って与えられたものです。当然その中には、現在の日本人にも、そのまま適用できるものもあります。でも日本人への律法ではないのです。それはいわゆる律法の中心をなす、十戒が与えられたときに、明らかに示されています。十戒が列挙される直前の文章に、どんなことが書かれているか、今一度、確認してみましょう。次のように書かれています。

「それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。『わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。』（出エジプト２０：２－２）

ここで非常にはっきりとしているのは、この後に続く十戒及び関連の律法が、神によってエジプトの国、奴隷の家から連れだされた人々に限って、特定して与えられたと言うことです。「わたしはあなた方をエジプトから、奴隷の家から連れ出した神、解放した神である。だから、あなた方はわたしだけをあなた方の神とし、わたしだけに仕えなさい」と仰っているのです。それで神は、「わたしは、あなたの神、主である」と、ご自分をイスラエルの神、主であると自己紹介しておられるのです。これほど明確な言葉があるでしょうか。どうしてこの律法が、全人類に与えられたものだと言えるのでしょか。そう言う誤解が、異邦人である日本人の宣教の、大きな妨げになっているのです。

旧約聖書はあくまでも、ユダヤ人が神の救いの器として、大きく用いられるための教えと訓練を目的にして、特別に与えられたのです。その事実をないがしろにして、時代も歴史も文化も環境も原語も感覚も良心も大きく異なる、現代の異邦人たちにそのまま適用しようとするのが、とてつもない間違いであることに、世界中のキリスト教会が気づいていないのです。創造されたときに、神に似せて造られた者として、造り主に相応しく聖く正しく生きるために、人間としての生き方をするように与えられたのが、心に記された律法です。その心に記された律法の普遍的原則は、ユダヤ人に与えられた律法である、旧約聖書にも良く現れています。しかし旧約聖書は、普遍的律法と同じ原則を持ちながらも、あくまでも当時のユダヤ人の暮らし方、文化、環境、言葉などに合わせただけでなく、ユダヤ人の選出に関わる人類の救いという、大きな目的のために与えられたものなのです。誰にでも与えられたものではないのです。普遍的いましめでも、普遍的教えでもなく、あくまでもイスラエル民族、ユダヤ人に与えられたものです。普遍的

律法が、神の選民でありユダヤ人に適応されて、与えられたのです。

Ⅲ.　人間が人間として生きるための本能と、救い主を受け入れるための教導書

人間の心に記された律法は、人間としての本能に深く刻み込まれた、神の人間に対する指針であり、人間が人間として生きるための基盤です。人間は人間として、このような生き方をしなければならないという、本能的感覚や欲求が、創造の時、神に似た性質として組み込まれていたのです。これは知識的な理解とは別で、それに先立って与えられていたものです。

最初の人間は多分、神様についての知識や理解も与えられていなかったことでしょう。これらは、神様とのお付き合いの中で、身についてきたのでしょう。私のような電気も通っていない田舎で育った後期高齢者は、コンピュータなどとても使いこなせません。ところが、生まれた時にすでに周りにコンピュータ製品が沢山溢れている中で育った子供たちは、どんどん使いこなしています。生まれたとき、そこに神様がいらっしゃった。だから神様とのお付き合いの中で神様を知り、理解してきたのが人間の神についての知識でしょう。生まれたばかりの幼子は母親のことも父親のことも、何にも知りません。しかし、抱かれ、あやされ、乳を飲まされ、おむつを代えられ、お風呂に入れてもらう中で、父母を知り理解して行くのと同じです。

ですから人間が罪を犯して神から追放されてしまったとき、人間はたちまち薄くなった神との交流の中で、神のことを忘れて、あたかも神が存在しないような社会を、形成してしまいました。神との付き合いによって培われ、育てられた神についての知識は、付き合いが失われるとどんどん希薄になり、失われてしまったのです。ただ気高く清く、大きく、正しい方がいらっしゃる。自分たちはこの方を畏れ敬い礼拝しなければならないという、感覚的本能、宗教的感覚は失われなかったのです。そのために、人間は神ではない者を神として崇め、礼拝する、偶像礼拝に陥ってしまったのです。創造主である神は、この偶像礼拝を忌み嫌い、人間を厳しく責め激しく罰しています。人間はすでに、神との付き合いの中で、ある程度、神についての知識、身に着けていたはずです。また、他の被造物についての知識も積み上げてきていたはずなのです。神との付き合いの中で培われた知識と知恵は、創造主である神と創造物との区別と識別をするには、充分であったはずなのです。それにも拘わらず、人間は驕りに駆られて、偶像礼拝に陥り、結果として、神の厳しい裁きに遭うことになったのです。その辺りのことがロマ書の１章に記されている、全人類に普遍的な偶像礼拝です。この偶像礼拝は、本質的にはイスラエルの偶像礼拝と同じですが、まったく違う点があります。それはイスラエル民族、後のユダヤ民族が、すでに、このような偶像礼拝に陥っていた諸民族の中から、神の御用のために特別に選びだされて、神の民となったところにあります。イスラエルの民は、改めて、出エジプト記に記されているエジプト脱出に伴う数々の奇跡を通して、強烈で明瞭明白な神の自己顕示、自己紹介を与えられています。また約束の地カナンを目指す旅の途中で、創世記と言う稀有稀代の書物を与えられ、彼らの神となってくださった神は、天地創造の神、まったく次元の異なる存在、あらゆる自然物を超越した存在であると、重ねて自己紹介をされていることに表れてい

ます。イスラエルの神となってくださった真の神とは、どのような存在なのかを、改めて、疑いようのない知識として与えられ、その上で、明確な言葉によって偶像礼拝の禁止の命令を受けたということです。したがって、イスラエルの偶像礼拝の罪は、異邦人の偶像礼拝の罪よりもずっと重い罪なのです。

旧約聖書の律法を、そのまま異邦人に適用する間違いは、このイスラエルに対する偶像礼拝の禁止をそのまま異邦人に適用し、異邦人の偶像礼拝をイスラエルの偶像礼拝の罪と同等に扱い、偶像礼拝の罪を犯していると言って責めたてることです。それが福音の宣教地でどれだけの反発と、憎しみと論争を生み出し、激しい敵愾心を作り出し、正しい福音宣教の障害、障壁となってきたことでしょうか。異邦人の偶像礼拝にも様々な種類があり、素晴らしい宗教心と倫理観が織りなす、高度に発展したものもあれば、陳腐な神観念と金儲けのためだけのものもあります。それらをただひとまとめにして、偶像礼拝と断罪し、罪悪視し、嘲笑するのは、聖書の権威を認めている人のすべきことではありません。それらの偶像礼拝にも、天地創造の神を礼拝するのと本質的に同じ、精神がどれだけ残っているか、福音を語るための導線とするものはあるか、その倫理観には、人間としてのあるべき姿が反映されているかなどなど、注意深く観察し、良いところは良いと言い、見上げるべき点は見上げたものだと判断する、公正さ、あるいは公平さが必要なのです。多くの日本人クリスチャンが持っているような、偶像礼拝をしていないのは、罪を犯していないことである。したがって、唯物論や無神論は罪ではない、無宗教は責められていないという感覚は、大きな間違いなのです。天地の創造者の存在を否定したり、無視したりして生きること、与えられた人間性を否定しながら生きることの方が、もっと大きな罪なのです。ただ、律法が与えられた当時、あるいはそれ以前も、無神論と言うのは余り広がっていなかったし、無宗教と言う人も少なかったために、聖書では、「愚かな者は心の中で神はないという」と言うほどの、僅かの言及しかないのです。聖書は、圧倒的多数の人々が、何らかの礼拝対象を認めていた時代に、そういう人たちを対象に書かれているのです。現代の日本のように、大多数のものが、神の存在を否定しながら、何かを礼拝しようという宗教心を持ち続けている、不思議な背景ではないのです。

信じている宗教が異なり、倫理観も、道徳心も異なっている人々とは、たとえ話し合う機会があっても、合意点を見つけることが困難です。しかし、そういう宗教や倫理観の表面的違いを横に置いて、人間の本性である優しさ、思いやり、痛みの共有、公平さ、同情、感謝する心、恩返しをする気持ちなどに話を向けると、多くの共通点を見つけ出すことが出来るのです。私たち福音の宣教を目指す者は、偶像礼拝の間違いや愚かさを笑い、罪を責める前に、パウロがアテネでやったように、話し合いの糸口となる共通点を見出し、称賛し、心を開いてもらい、そこに福音を注ぎ込むようにすべきです。神道の「神ではない神」、神以上の存在、目に見えず手で触れることも口で表現することもできない、至高の存在について、話を合わせることが出来ます。仏教ならばそれぞれの宗派によって、随分考え方も教えも異なりますが、それでも、いろいろ話を聞き出して、共通点を発見することです。弥陀の本願、慈悲などは格好の話題となるでしょう。共通点を強調してから、表面上の違いに触れ、表現や譬えは異なり、違ったものに思える事柄も、深みを掘り起こすと共通点があることにも、思いを寄せるのが大切です。そして、聖書が教える至高の存在、天地の造り主について話が出来ればいいのです。仏教には創造者という意識はありませんが、聖書が教えることをお伝えすればいいのです。すぐに同調をもとめる必用はありません。ただ聖書の

教えをお話しできればそれでいいのです。聞いている人は、自分で創造者のいる宗教と、創造者のいない宗教を、自分で比較し考えることでしょう。そこに、聖霊のお働きを期待すれば、むやみやたらに論争せずに、話し相手の祝福をお祈りしてあげることもできます。私たちが福音を語るのは、論争に勝って満足するためではなく、その人が福音を受け入れることを願い、救われることを願ってのことです。祝福を祈ってあげるのは当然です。

　ユダヤ人に限って与えられた律法、旧約聖書は、当然、ユダヤ人を読者として想定して書かれたものです。たとえその中には、ユダヤ人以外の人たちにも、役立つ情報が含まれていたり、ユダヤ人には面白くないことが書かれていたりしたとしても、ユダヤ人に宛てて書かれたものに、違いはありません。本来、ユダヤ人がこの文書を読むか、読んで聞かせられるかが前提として書かれたものです。ユダヤ人以外のものがこの文書を読むときは、間違っても自分に当てて書かれているなどと、思い込まないことです。とは言え、読み方によっては、ユダヤ人ではない私たちにも、非常に益になる情報や、普遍化して学ぶべき教えも、たくさん書かれています。筆者が長い間書き続けてきたことも、ほとんどがこの書物からの学びによるものです。本来、全人類に救いを及ぼす、神の大きな御計画に用いられるために選ばれたユダヤ人を、導き教え訓練するために書かれたこの書物から、異邦人の救いに関する神の御心を探ろうとしているのです。それは明確には教えられてはいませんが、神学的に十分可能なようにされているのです。今頃になって、筆者のような一介のどさ回りの伝道者が調べなければならないのは、多くの偉大な神学者が、このことに気づかなかったためです。長いキリスト教の歴史の中で、教会がこのことに見向きもしなかったのは、福音宣教をまじめにまた聖書的に考えてこなかったからです。教会がこのことに無関心のまま今に至り、まじめな神学者たちが、この問題に無頓着だったのは、聖書信仰と言うものを誤って理解し、全人類へ向けての福音宣教と言う教会の使命を、まったく誤解していたためです。本来ならば、いま筆者が言おうとしていることは、とうの昔から、理解され把握されていなければならなかったのです。

すでに述べたように、パウロは、実際にはあまり異邦人伝道をしてはいませんでした。したがって、異邦人伝道、異邦人宣教のための諸問題について、ほとんど論じてはいません。彼が論じたのは、あくまでも旧約聖書から、キリストを信じることの正当性であり、ユダヤ人の民族的枠を超えての福音、普遍的福音の力であり、そこに働かれる聖霊の力であり、さらには教会の在り方などでした。パウロの聴衆の中には多くの元異邦人が含まれていましたが、現役の異邦人は少なかったのです。多くは、かつては異邦人であったけれども、いまは、ユダヤ人と認められていた人々、あるいは、ユダヤ人になろうとしていた人々、さらには、ユダヤ教に強い興味を抱き、その教えに魅力を感じ、自分もユダヤ教徒になることを考えながらも、色々な社会的要因などで、躊躇していたような人々でした。つまり、ユダヤ人の会堂に顔を見せていた、生まれながらのユダヤ人でなかった人々でした。パウロは異邦人伝道と言う点では、現在日本人のクリスチャンとして、異邦人である日本人に福音を伝えようとして、悪戦苦闘している私たちに比べても、素人に近かったのです。異邦人伝道の困難さも、苦しみも、悲しみも体験してはいなかったのです。

とはいえ、パウロは天性の神学者であり、異邦人伝道に関わる問題の本質には、僅かながらですが触れているのです。触れているだけで発展はさせていませんが、触れていることは触れているのです。それが、理論的

にはロマ書の２章１２節から１５節までの言及であり、実践的には使徒の働きの１７章の、アテネでの伝道説教の記録です。パウロはロマ書２章の記述では、異邦人の心に記されている律法とは、正確には何のことなのか、全く説明していません。それが、旧約聖書を知らなくても旧約聖書の教えを守っている人そのものが、その人自身の律法となっているというだけです。このパウロの記述の元となっている、聖書の教えを神学的にたどっていくと、創世記の１章２７節の記述に行き当たります。またアテネでの説教の大前提となっているのも、創世記１章の天地創造の物語です。話がユダヤ人に与えられた旧約聖書の記述に至るのですが、この記述は、ユダヤ人に与えられながら、普遍的要素が非常に強いものです。その記述が全人類に及ぶ意味を持っているからです。

日本に生まれ日本に生きている私たちの多くは、たとえば、２０２０年に改正された、プーチンによるプーチンのための、ロシアの憲法についてはほとんど知りません。近代国家の憲法と言えるものかどうかさえ知りません。多分言える部分もあることでしょう。でもそこに、人権宣言のような項目があるのかどうかは、はなはだ疑わしいと感じるのです。このような憲法が、いま日本に住む私たち日本人に適用されたら、一体どういうことになるでしょう。とんでもないことです。でもそのとんでもないことが、神学の世界では行われているのです。旧約聖書が無制限に異邦人に適用されているのです。でも、プーチンによるプーチンのための憲法に、近代的な人権宣言の文言が含まれていたとすると、少なくてもその部分だけは、私たち日本人にも、かなりの割合で適用できるものであるはずです。旧約聖書の創世記の初めの部分、イスラエル民族がエジプトを脱出して、民族としての独立を果たし、国家形成に向かって動き出す前の記述は、私たち異邦人にも適応が可能な普遍的部分です。つまり、ユダヤ人の救いと理解されていた福音を、普遍的な、全人類の救いと理解し直させた、パウロの福音理解を少し脚色して、聖書本来の、全人類の救いという神の目的と、その目的遂行のために選び出された、イスラエル民族に対する神のお取り扱いと、理解し直させる必要があるのです。現在世界におけるユダヤ人の数は、わずか０.２％に過ぎないのです。

ですから筆者は、よほどのことがない限り、一般の信徒に、旧約聖書全巻を丁寧に読むことを勧めません。特に、小預言書は勧めません。どう読んでも、現代に生きる日本人には、あまり関わりがないからです。詩編が好きな信徒には、詩編が書かれた当時のイスラエル人の倫理観が、イエス様がお教えになった倫理観とはまったく違うものであることを、良く理解して読むように注意をします。イエス様は、敵を愛し迫害する者のために祈りなさいと、お教えになったのですが、詩編は敵を憎めという古い教えに従って、復讐の精神に溢れています。歴代誌の中に出て来る、数ページに及ぶ、カタカナの名前の列挙も、読まなくていいと言います。そんな、なまくら牧師をやっていますが、創世記と出エジプト記は、１０回でも２０回でも繰り返して読むように励ましています。旧約聖書のどの部分が、より普遍的な意味を持っているかが、判断の基準です。

同じモーセ５書でも、レビ記などはほとんど読まなくても良い部分に入ります。イスラエル人、しかもレビ族、特に祭司には重要な書物でしたが、新約時代に至ると、その重要度は低くなってしまいました。神殿が破壊され、万人祭司の時代となり、レビ族の重要性も失われ、イスラエルも離散した民族になってしまったのです。現代の異邦人には、レビ記に隠されている普遍的意味を、よほど丁寧に教えられでもしない限り、ほとんど意味のない書物です。またレビ記の教えと並んで、出エジプト記にも、神殿の前身となった幕屋についての

教えや記述がみられます。ただ、幕屋や神殿の模型を作って喜んだり、敷地の平面図を観て楽しんだりするのも、異邦人の信仰にはあまり役立ちません。筆者は、幕屋が神との会見の場であり、神の臨在を感じるべき場所であり、正式な礼拝を捧げるべき場所であったことを教えると共に、幕屋が、人を神から隔てる重要な役割を持っていたことも教えます。その役割は、イエス様の死に伴って、神殿の幕が真っ二つに裂けたことによって、終わりを告げたことを教えます。今や、聖霊が私たちの内にお住みになるほどで、神との隔てが取り除かれたのです。この辺りは、宣教論として大切な部分です。英語を話す私たちの仲間の教会には、自分たちの教会あるいは教会堂に、「何々テンプル」すなわち神殿と名付ける習慣が残っていますが、ちょっと恥ずかしい気持ちになります。神殿は取り除かれたのであり、再び建ててはならないものだからです。教会は神殿ではなく、多くの意味で神殿を超えるものであり、私たちは神殿に戻る必要はなく、戻ってはならないのです。

Ⅳ.　人類すべてを裁くものとユダヤ人を裁くもの

律法の機能は、すべての民族に与えられた普遍的律法も、ユダヤ人だけに与えられた律法としての旧約聖書も、共に、人間を救うものではなく、かえって滅ぼすものであると教えられています。（ロマ書２章１２節）律法はあくまでも、それが与えられた対象が、どう生きるかに関係するもので、救いとは関係がないのです。旧約聖書を与えられなかった異邦人は、すべての人類に与えられた、神に似せて造られた自分の本性に照らし合わされて裁かれるだけですが、ユダヤ人は、その心に記された律法の裁きに加えて、旧約聖書と言う律法にも照らし合わされて裁かれるのです。ユダヤ人は旧約聖書と呼ばれる律法を与えられたという、ある意味での優越性を持つものですが、その律法によっても裁かれるという、責任をも負うものでもあるのです。

ところでこの裁きは、それぞれの個人がこの世で行った、行いに応じて裁かれるということですです。それは聖書全体で、幾度か繰り返して教えられていますが、最もはっきりしているのはコリント人への第二の手紙第５章１０節かと思います。しかし、行いに応じて裁かれるという言葉を、文字通りあるいは字義通りに理解するのが、はたして正しいのかどうか、注意する必要もあります。イエス様は、心の中で姦淫を犯すという意味のことをおっしゃって、実際の姦淫が行われる前に、すでに、姦淫が行われていることを指摘しておられるからです。この心の中の妄想と、実際に姦淫という罪が犯されることが、どういう関係にあり、いかなる責任を伴うかを判断なさるのは、神様であって私たち人間ではないからです。

またこの裁きの対象には、ユダヤ人も異邦人も含まれるのですが、裁きの基準が異なります。異邦人は、再三強調してきたように、あくまでも心に記された律法、すなわち神に似せて造られた、人間の本性に照らし合わせて裁かれるのですが、ユダヤ人はそれに加えて旧約聖書、文字で書かれた律法に照合して裁かれるということです。この場合、二つの律法の違いが問題になることが、考えられます。それはイエス様のお働きの中でも、たびたび問題になったことがあります。ひとつは安息日の厳守という、時代錯誤の問題です。安息日は永遠に守られなければならない律法ではなく、イエス様の時代には、すでに律法としての機能を失っていたにも拘らず、すなわち、時代錯誤に陥っていたユダヤの律法主義者たちは、それを固守し続け、他人も固守すべきだと考え、そのように一般の人々を教えて、余分な重荷を加えていたのです。またイエス様は、旧約聖書の律

法が低い倫理感覚の中、その中に生きる人々のために定められたもので、イエス様の時代にはもっと進んだ、高度な倫理感覚の中で生きるべきだということを、強く主張されました。「あなた方は・・・・と言われていたことを聞いています。しかし私は、あなた方に言います」と仰って、イエス様は、神の権威をもって旧約聖書の倫理よりも、さらに高い倫理をお与えになったのです。特に愛すること、赦すことについてのイエス様の教えは、ユダヤ教の復讐の倫理を超えるものだったのです。イエス様は、ユダヤ教の倫理を否定されたのではなく、ご自分に従おうとする者たちに、さらに高く優れた倫理を与えてくださったのです。ですから今、多くのクリスチャンが詩編を好むことに、少なからず問題を感じます。詩編の作者たちは、あくまでも当時の復讐の社会感覚で、詩を作ったからです。クリスチャンはそのことを理解し、現代的に読まなければ、すなわち、イエス様が新たにお与えになった倫理観で、理解し直して味わわなければならないのです。その精神は、「神は犠牲よりも憐れみをお好みになります」という、イエス様のお言葉に明白に顕わされています。

aa

ほかにも、旧約聖書の教えをイエス様の教えで、理解し直さなければならない、幾つもの重要課題があります。例えば、什一献金は、現在の民主主義社会で、政府に税金を納めている私たちにも、そのまま適用されるべきなのか、大きな疑問があります。当時のユダヤ人社会では、基本的に神聖国家であり、什一献金は宗教としての献金と、国家への税という両方が含まれていたからです。今の日本に生きる私たちは、国に対する税金は、献金と別に収めているのです。それなのに什一献金を教会に捧げるのは、2重払いになってしまうのです。私たちは、国家の税は国家におさめ、神様への感謝の献金は、教会に持って行くのです。さらに、ユダヤ人はユダヤ人以外の人間と、結婚してはならないという定めがありますが、これを現在のクリスチャンに直接適用して、クリスチャン以外の人と結婚してはならないと教える、正当な聖書的基盤とするのは正しいかどうか、大いに疑問とされるものです。マラキ書に記されている律法の復唱が、現在のクリスチャンにも適用されるべきであると主張する人は、おなじように、クリスチャン以外の人と結婚していた人は、離婚しなければならないと主張しなければなりません。旧約聖書の律法の多くは、それが強調されたときの、時代と文化と事情をよくよく理解して、理解されなければならないのです。およそ５０年に及ぶバビロンの捕囚生活から解放され、国家を建て直そうと躍起になっていた、当時のユダヤ人たちの特異な必要性と律法の適用を、現代の私たちにそのまま用いようとするのは、おおよそ場違いなのです。

私たちは、聖書の教えを絶対の権威として認めます。しかしそれだけではなく、聖書の解釈と理解そして適用の仕方を、非常に注意深く行わなければなりません。そういう意味で、現代的で正しい聖解釈の方法が、緊急に必要なのです。とくに、異邦人の社会である日本での宣教を考えると、それが強く求められているのです。